

解説 複雑な歴史が絡み合うザンジバルの対立軸

東アフリカに位置するタンザニアは、アフリカ本土(タンガニーカ)とインド洋沖の島しょ部(ザンジバル)で構成される「共和制連合国家」です。

ザンジバルが、タンガニーカと合併してタンザニアの一部となったのはわずか46年前の1964年のことです。それまでまったく異なる歴史を歩んできたこともあって、ザンジバルは今でも大きな自治権を認められています。自治政府のトップは「大統領」です。

ザンジバルにはウングジャ島とペンバ島という2つの大きな島があります(人口比率は6対4)。この2つの島もまた異なる歴史をもっています。この差異がザンジバルの対立軸の原形となり、「政党」という形で権力闘争を繰り広げてきました。長期にわたってザンジバルで権力を掌握してきた「タンザニア革命党」(ザンジバル CCM)は、ウングジャ島民を主な支持層としています。ウングジャ島民の大半はアフリカ系です。

対照的に、ペンバ島を支持基盤としているのが「市民統一戦線」(CUF)で、支持者の大半が同島のアラブ系住民です。

両島の歴史が初めて激しくぶつかったのが1960年代の独立過程でした。ザンジバルはいったんアラブ系住民主導で「ザンジバル王国」として英国から独立しました。しかしその1カ月後、スルタンの支配に不満を抱いていたアフリカ系住民が中心となって革命を蜂起し、5000人以上のアラブ系住民を殺害。「ザンジバル・ペンバ共和国」を成立させました。

武力闘争に加えて、両島の間には常に「経済格差」という問題も横たわっていました。

かつては、クローブ(丁子)の世界最大の生産・輸出基地だったペンバ島の方が豊かでしたが、1970~80年代にクローブの生産・輸出が落ち込み始め、またウングジャ島の観光産業が振興してくると、両島間の貧富の差は逆転。その後はウングジャ島の方が豊かになりました。貧しくなったペンバ島民の不満の受け皿となって勢力を伸ばしてきたのがCUFです。両島(党)の対立には、こうした事情が複雑に絡み合っています。

ただ両人種・エスニック集団はともに、言語がスワヒリ語で、宗教はイスラム教です。文化的な基盤を共有していることもあって、同じ“ザンジバル人”として、反目するのではなく協調したほうが得策との機運が高まった結果、今回の権力分有が成立したと考えられます。

ザンジバルで権力分有が導入されたのは初めてですが、実は、タンザニア共和国政府は92年まで、権力分有政策を採用していました。タンザニアの旧憲法は、ザンジバルの大統領が自動的にタンザニアの副大統領になる、と定めていたのです。このため、ザンジバルの人々の意識の根底には権力分有政策一般に対する「親近感」や「信頼感」があるのではと推測されます。